

令和元年度第1回農業大学校外部評価委員会

議事録

I 日時 令和元年5月28日(火) 14:00~16:00

II 場所 大分県立農業大学校 会議室

III 参加者 外部評価委員

教育関係者 大分県高等学校教育研究会農業部会 会長

(久住高原農業高等学校長)

小俣 秀之 氏

生産者 大分県指導農業士会 会長

藤野 渉 氏

〃 大分県農業法人協会 副会長

栗田 洋蔵 氏 (代理)

〃 地元女性農業者

古庄 京子 氏

卒業生 大分県立農業大学校同窓会 副会長

湯浅 正徳 氏

農業団体 大分県農業協同組合常務 (営農担当)

三浦 堅二 氏

行政 豊後大野市 農業振興課長

志賀 正 氏

〃 大分県中部振興局 農山漁村振興部長

石井 修三 氏

農業大学校

校長、副校長、次長兼総務学生課長、農学部長兼教務課長、研修部長

IV 次第

1 開会 (進行:松原次長)

2 委員紹介

3 校長あいさつ

本校の学校評価制度は平成23年度より実施され、今年で9年目となります。本校には3つの大きな運営方針がありますが、委員の皆様方からのご助言や提言を踏まえ年々、改善を重ねています。

今後とも外部評価委員会の皆様にはご支援・ご指導いただきたいと思っております。短い時間ではございますが、よろしくお願ひします。

4 本校職員紹介

5 大分県立農業大学校評価制度について

副校長より資料P2~P6を説明

6 議事 (議長:小俣秀之委員)

(1) 報告事項

①平成30年度の重点目標に対する取り組み結果

運営方針1「活気あふれる学園づくり」、運営方針2「質の高い教育の提供」、

運営方針3「新規就農者の確保」の取り組み結果について校長より説明。

②令和元年度 大分県立農業大学校の概要

「学校運営体制」、「農学部学生状況」、「研修部研修生の状況」について校長より説明。

(2) 審議事項

①平成30年度の重点目標に対する取り組み結果

《質疑・応答》

(石井委員) 定員に対して入学者が36名だが他県の農大はどうなっているのか。

(校長) 九州では宮崎県が定員をオーバーしてたが今回定員割れするなど本県と同じように学生の確保には苦労している。ここ数年はどこも総じて厳しい状況だと思う。また県内の職業系短大も同様である。特に地方の4年制大学には以前より入学しやすい傾向にあるようで、そちらに生徒が流れている

という声をきく。本校も募集体制を考えていきたい。

(小俣委員) 募集状況で言えば農業高校・農業系高校に進学する中学生数が減少している。母数が少ないため農大に行く生徒も少なくなっていると考え

②令和元年度 大分県立農業大学校の概要

《質疑・応答》

(栗田委員) 卒業生の進路で就農率を上げたいのは理解できる。ただ進路希望として実家が農家だから家にそのまま就農するよう指導するのは一概に良いとは言えないと思う。特に県外など外に出るのが面倒だから家に就農するというのはいかがなものか。一度は(家)の外に出て、改めて実家に帰ってくるのも良いのではないか。法人協会での経営者でもそういったパターンの方が多い。

(石井委員) 社会の厳しさを知って家を継がせたいと言っている農家もある。

(農学部長) 現在、学生と進路面談をしており、法人就農希望が多い。中でも実家が農家で即、跡継ぎとして実家に就農ではなく、自営をするにあたり法人に就職したいという学生もいるので自営者数向上についてはやりようがあると考えている。

(校長) 基本的に農大は就農率を上げるのが使命である。しかし、学生も様々なところから集まってきているので無理に自営をすすめるのではなく一度法人に勤めて自営するという指導もしている。そういうところもご理解頂きたい。

(藤野委員) 率ではなく農業者を増やすことが大切。農家も子供に継いでほしいがどうしても甘えが出る。特に小規模農家、親子が一对一の所は難しいのではないか。

(栗田委員) 法人就農から後継として自営就農したというような調査は行っているのか。

(副校長) 卒業後は法人に対して定着調査は行っている。

(古庄委員) 農業の魅力を農大でとことん教えてほしい。

③令和元年度 運営方針・数値目標・主な対策

運営方針1 「活気あふれる学園づくり」について校長より説明。

質疑無し

運営方針2 「質の高い教育の提供」について校長より説明。

《質疑・応答》

(石井委員) 日本農業技術検定の中身を教えてほしい。

(農学部長) 農業に関する基礎知識を筆記試験で問う。4肢択一。共通問題と選択問題がある。実技は2級からで本校は実技免除校となっている。

(志賀委員) 機械の使い方についてももう少し教えておいてほしい。草刈り機で怪我が発生している。

(研修部長) 学生に対しては入学後、基本的操作方法、分解・組み立てについて研修させている。ただ習熟度についてはその使用頻度がコースにより異なるため学生によりばらつきがある。

(志賀委員) 取得している資格は法人からの要望なのか。

(研修部長) 法人からの要望ではなく本校として農業をする上で必要と思われる資格を取得させている。

(藤野委員) 農大卒を雇用しており資格を取得しているが、教えるまで操作できなかった。打合せもなく自分勝手に機械を操作し仕事を始める。割り当てられた仕事はするが指示待ち。挨拶などコミュニケーションが上手くで

きないので仕事がきちんと進まない。技術も大切だがコミュニケーション能力を向上させてほしい。

(研修部長) 先ほども申し上げたようにコースにより習熟度が異なる。特に果樹や花きコースは使用頻度が他コースに比べて少ない。就農後現場で役に立つよう該当学生に対して卒業前にロータリー実習を行うがそれも入り口の段階でしかない。気が利かない学生に対して我々も対応に苦慮している。

(栗田委員) 人間力を高めてほしい。人間の基礎的なところができていないとコミュニケーションがとれない。他の法人に聞いても同様のことが起きている。

(湯浅委員) 研修を受け入れているが言われたことはできるが終わった後は「次に何をしましょうか」など、何も言ってこない。だから社会に出たときにそれができない。そのあたりを一番に教育して頂くとそこから勉強ができるようになると思う。

(栗田委員) 学生に対しては将来、会社の財産になる人材として期待をしているということを踏まえ、その態度でこちら側が接するべきではないか。

(校長) 学生に対しては生活態度も含めて指導していますので今のご意見を踏まえ指導していきたいと思う。

(小俣委員) 高校三年間でも指導ができていない部分もあるのでただいまのご意見を県下の農業系高校にも話をしていきたい。

(藤野委員) 基礎は学校よりも家庭であるので PTA にももう少し言うべきではないか。

運営方針 3 「農業の担い手の確保」について校長より説明。

《質疑・応答》

(校長) 農業法人との就職相談会は今年度 43 社に参加いただいた。年々参加希望企業が増えている。特に昨年度農大卒で入社した新入社員を連れてきた法人も目についた。学生に対して話をして頑張っていると感じているので今後も力を入れていきたい。

(藤野委員) インターンシップに参加した会社はどのくらいか。

(副校長) この相談会后 28 名が 24 社に参加している。

(小俣委員) 振興局との連携会は何をしているのか。

(研修部長) 研修部は社会人が入校していて考え方はしっかりしている。ただ農業現場は知らないので実際の就農やファーマーズスクールについて振興局から情報を得るなど連携している。

(石井委員) 振興局も農大担当がいて高校にも行くので農大の情報提供など連携させてもらっている。

(3) その他

特になし